

経営情報学会 2021 年度年次大会

柿原正郎（かきはら まさお） グーグル合同会社
（大会実行委員長）

1. 大会概要

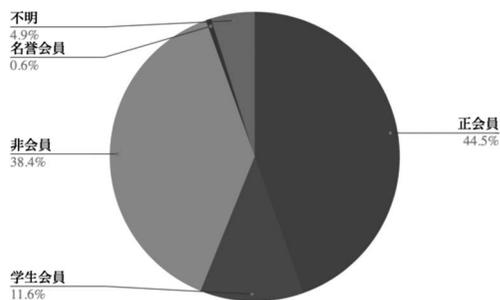
2021年度の年次大会は、2021年6月13日（日）の午後にオンライン（Zoom）で開催致しました。大会テーマは「多様性から生まれる組織イノベーション」とし、今回はじめて企画当初から「オンライン開催」を前提として年次大会の準備を進めてきました。2021年に入っても新型コロナウイルスの感染拡大状況が読めないなか、ギリギリまで対面開催の可能性も探ったのですが、この際思い切って最初からオンライン開催を前提にして企画と準備を進めたほうがより意義あるものにできるのではないかと判断しました。また、昨年度に引き続き、参加費を無料とすることで、現会員はもちろんのこと、非会員の方々にも気軽に参加していただけるものにするという方針を固め、準備を進めて参りました。

その結果として、計164名の方々に事前参加登録をしていただき、そのうち会員種別不明の方も含めると4割を超える非会員の方々に参加登録をいただきました。昨年度の年次大会やプラクティショナーセミナーなどでの参加者のうち非会員割合は概ね2割前後でしたので、通常の2倍の割合で非会員の方々に参加登録していただけたのは望外の喜びでした。

当日の参加状況としては、時間帯によって変動はあったものの、最大同時接続数としては130名を超える方々にご参加いただきました。参加率という点につきましても、非常に多くの方にご参加いただきましたことに運営側としても大きな喜びでした。ご参加いただきました方々には、改深くお礼申し上げます。

2. 学会賞講演と招待講演

今年度の年次大会の参加率が高かった一番の理由として考えられるのが、「多様性から生まれる組織イノベーション」という大会テーマのもと、互いに



2021年度年次大会 事前登録者内訳

強く関連した問題を扱う学会賞講演と招待講演の魅力につきると思います。

まず学会賞講演には、2020年度の学会誌論文賞を受賞された論文「多様性が組織の成果に及ぼす影響—フォールトラインによる考察—」(Vol. 28, No. 4, pp. 189–209)をもとに、著者の一人である熊田ふみ子さんにご講演いただきました。目下どの企業も大きな課題として直面している組織の「多様性」と「パフォーマンス」の関係について、フォールトラインの概念を適用して、エージェント・ベースモデルによるシミュレーションと企業の実態調査を用いた実証的な考察をご紹介いただきました。特に、多様性を活かした組織内コミュニケーションはさまざまなプラスの影響をもたらすという発見は、今後の組織デザインの実務に対しても大きな貢献をもたらすものだと感じました。

一方、招待講演は、現在プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会（通称、フリーランス協会）の代表理事をされている、平田麻莉さんにご登壇いただきました。平田さんは、フリーランスワーカーやパラレルワーカーなどの新しい働き方を体現される方々を支援するムーブメントづくりや環境整備に奔走され、日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2020」を昨年受賞されました。「拡張するワークプレイス、流動化する個人、



熊田ふみ子氏による2020年度学会賞講演



平田麻莉氏による招待講演

ネットワーク化する組織」という刺激的な講演タイトルのもと、平田さんから現代のフリーランスワーカーやパラレルワーカーが直面している課題やそれに対する支援のあり方、さらにはそうしたことによりもたらされる多様な働き方と組織のあり方についてお話いただきました。

どちらのご講演も、いまだ収まりを見せない新型コロナウイルスの脅威のなか、働く個人や組織のあり方を考えるにあたり、大変有意義なご講演でした。それを反映するかのように、Zoom上で行われた講演中に活発な質問やコメントがチャットに投げられ、公演後の質疑応答の際にも多数の質問がよせられたことで、予定していた時間をオーバーすることになってしまったことは、運営側としては嬉しい悲鳴というところでした。

3. ポスター発表セッション

今回の年次大会では、もう一つ大きなチャレンジがありました。それは、経営情報学会の昨年度までの会長で、そして今回の年次大会の大会委員長でもある妹尾大前会長が就任以来推進してきた「萌芽研究支援」の体現としてのポスター発表セッションの

実施です。

ポスター発表セッションの実施には二つのねらいがありました。まず、2018年度までは研究成果の発表の場としての研究発表大会が春と秋の年2回開催されていましたが、昨年度から春の研究発表大会を学会の年次大会に切り替えて開催するようになったことで、研究成果の発表の場が減ったことに対する対応です。もう一つは、経営情報学会の特色やユニークさをより明確に打ち出すために、特に変化のスピードが早い情報通信技術に関わる領域を研究対象とする学会として、新しいテーマやトピックを積極的に扱う萌芽的な研究をより積極的に支援したいという思いです。これを実現する場として、どのようなやり方があるのか、大会運営のコアメンバーで何度も議論した結果、このポスター発表セッションを実施することにしました。さらに、その萌芽研究支援の姿勢をより明確に打ち出すために、ポスター発表のなかから「研究構想中や研究途中の段階の研究発表を対象」と対象を明確に設定して、そのなかで特に優秀なものに「優秀萌芽研究賞」を出すことにしました。

ポスター発表セッションは今回はじめての試みだったため、事前の告知が十分に行き届かなかったという懸念もあったのですが、蓋を開けてみれば、事前の予想を大きく上回る発表申し込みをいただき、最終的には37本のポスター発表をオンラインで行うという、こちらまさしく嬉しい悲鳴という状況でした。当日の運営の仕方はまだまだ改善の余地があったと思いますが、発表者の皆さまのご理解とご協力のおかげで、なんとか滞りなく実施することができました。

すべてのポスター発表終了後、すぐに優秀萌芽研究賞の選考に入りました。授与数についても、全発表数の5分の1程度という目安は設けたものの、できるだけ多くの萌芽研究を支援したいという思いも込めて、最終的には以下の6本の発表に対して、優秀萌芽研究賞を授与することになりました。受賞された発表者の皆さま、本当におめでとうございます。皆さまには今回のご発表をさらに発展させて、ぜひ秋の研究発表大会でもご発表いただけることを期待しております。



優秀萌芽研究賞受賞者の皆さま

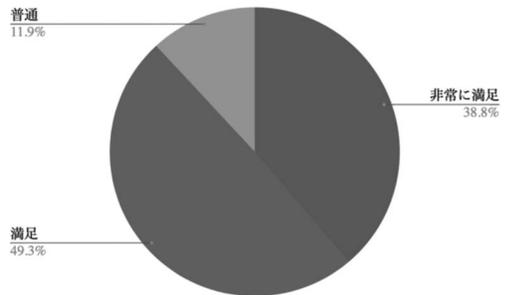
優秀萌芽研究賞 受賞発表リスト

発表タイトル（発表番号順）	発表者
「地理的距離と多次元ネットワーク距離がもたらす代理学習—自動車産業のサプライヤーネットワークに関する実証研究—」	古川翔大（東京理科大学） 大江秋津（東京理科大学）
「小規模小売店におけるQRコード決済の導入と継続的利用に関する意思決定過程—M-GTAによるアプローチ—」	新井啓矢（横浜国立大学）
「ロールモデルが二世起業家に与える起業成功への影響とメカニズム—米国新興企業家のパネルデータによる実証研究—」	菊池百々帆（東京理科大学） 大江秋津（東京理科大学）
「組織内の相互作用が個人の創発型即興スキルの発達に与える影響」	加藤紗輝（東京工業大学） ホーバック（東京工業大学） 妹尾大（東京工業大学）
「バーチャル研究室の利用促進に個人特性が与える影響—イノベーション普及理論とHEXACOモデルによる実証研究—」	國本麻悠子（東京理科大学） 大江秋津（東京理科大学）
「COVID-19感染対策による経済影響分析シミュレータの開発」	高橋耕平（岩手県立大学） 市川尚（岩手県立大学） 後藤裕介（芝浦工業大学）

4. 大会を振り返って

今回の年次大会は、当初からオンライン開催を決定して、さまざまな方々のご理解とご支援をいただき、実現にまで漕ぎ着けることができました。大会運営に携われた方々、学会関係者の皆さま、そして当日ご参加いただきました登壇者や参加者の皆さまに対して、重ねて熱く御礼申し上げます。

大会終了後に実施した参加者アンケートの結果（有効回答数 67 名）からは、9 割近い参加者から「非常に満足」もしくは「満足」という回答が得られ、



参加者アンケートにおける満足度評価

満足度としても非常に高い水準をいただくことができました。また、冒頭に書いたように、今大会の特徴として、大変多くの非会員の皆さまにご参加いただけたことを再度指摘したいと思います。オンライン開催にはそれに伴う多数のイレギュラーな準備や調整が必要な点も少なくないのですが、オンライン開催の最大の利点としては、全国どこからでも参加可能、さらにはPCからでもモバイル端末からでも参加できるという点があります。特に非会員の人にとってみれば、週末に開催される馴染みのない学会のイベントに実際に足を運んで参加するというのはやはり大きなハードルかと思えます。この点において、今回は早くからオンライン開催を決定して準備を進めてきたこともあり、より多くの非会員の方々にご参加いただけたことは大きな成果だと思っております。

一方で反省すべき点もいくつか挙げたいと思います。まず、事前の告知方法の検討が十分でなかったためか、事前登録者数が164名にとどまったことです（前年度の年次大会の事前登録者数は約200名）。特に、「オンライン開催」に加え、「参加無料」という点についてももっと強く明確に発信すべきだったと思います。また、今回はじめての試みであったポスター発表セッションの運営方式も再考の余地は大きくあると感じました。37本という当初の予想を大きく超える発表数を当日の時間制約のなかで回すという想定外の苦労があり、もっと効果的な発表の仕方、またレビューの仕方など工夫できることはあったかと思えます。他にも細かい点では多数の反省点があるのですが、これらはすべて来年度の年次大会の企画検討に反映していただけるようにしたいと思います。

5. 全国研究発表大会のご案内

最後に、秋の全国研究発表大会のご案内です。11月13・14日に、兵庫県の武庫川女子大学で開催されます。その時期には新型コロナ感染状況も落ち着いていて欲しいと心から願うばかりですが、現在大会組織の皆さまのご尽力により、オンライン・オフライン双方での参加を実現する「ハイブリッド型」での開催を予定して、鋭意ご準備いただいております（詳細は本号掲載の大会告知記事をご覧ください）。オンライン、もしくはオフラインで皆さまにまたお目にかかれることを心待ちに致しております。

2021年全国研究発表大会 開催概要

開催日程：2021年11月13日（土）・14日（日）

開催場所：武庫川女子大学（兵庫県）

※ハイブリッド型での開催を予定

大会テーマ：「DXとマネジメントーデジタルトランスフォーメーションを成功に導くには」

組織：

大会委員長：福井誠（武庫川女子大学）

実行委員長：宗平順己（武庫川女子大学）

プログラム委員長：森田裕之（大阪府立大学）